

参・江戸湾の防衛 泥絵 品川台場築造図

しろはく古地図と城の博物館富原文庫 代表 富原 道晴

幕末海外列強は日本の植民地化を目論見、開港を迫り、幕府は諸大名に海防対策を促し、諸藩は全国に1千の台場を構築し、国民皆兵ともいべき、奇兵隊のような従来にない軍隊を創造した。この国民総動員ともいべき体制が諸大名の最新装備増強とともに、幕府権力の低下、崩壊を招くこととなった。対馬がロシアに、小笠原がアメリカに占有され、ペリー来航によって、品川台場が構築、さらに、生麦事件はイギリス艦隊の江戸湾侵入を招いた。これら欧米の脅威が、砲術を秘伝から科学へと導き、江川海防建議書で砲術は護國の要法とされた。砲術が日本の植民地化を防ぎ、日本を救った時代であった。ゴンチャロフは『日本渡航記』で「地球上で人間の生息する地理や統計の中で、ほとんど唯一の空欄になっているのは日本ばかりではないか」、クルーゼンステルンは『奉使日本紀行』で「日本人は兵器の用意も防守の考えもない、軍艦の備もなければ砲もなく、海軍の備もない。ヨーロッパの小軍艦で日本のいかなる大軍も殲滅できる」と記述しており、日本は建国以来の危機に瀕していた。大河ドラマで吉田松陰が密航を企てた時代とはそういう時代であった。

林子平が『海国兵談』で「江戸日本橋より、唐和蘭まで境なしの水路成り」と述べたように、そういった中でも、当時世界最大の都市江戸の防衛は幕府最大の課題であった。東京湾品川沖の海中台場は実に江戸湾防衛の不沈戦艦である。台場は当時の西洋戦艦の砲術射程を考慮し、オランダの築城書を元に設計された。5千人の石工や土工、2千隻の

土船を動員し、着工わずか10カ月で第1台場から第3台場が完成した。日米和親条約の締結により、建設は台場6基で中断したが、75万両、実に3兆円近くを投じた巨大国家プロジェクトであった。全国に献金を求め、各地に江戸近郊に資材調達と運搬を命じた資料が多く残されている。そして、ペリー来航と台場構築のニュースは瓦版として、全国を駆け巡った。

今回は、品川台場の設計図等歴史資料でなく、肉筆浮世絵の一種とされる泥絵で描かれた品川台場を紹介したい。泥絵は幕末から明治にかけて流行した、顔料に胡粉を混ぜて書かれた肉筆絵画である。表現し難い、落ち着いた、素朴な民画、浮世絵というより、大津絵のような雰囲気を与えてくれる。江戸の大名屋敷や東海道が絵柄として好まれ、江戸みやげとして全国に波及した。国難の海防施設、ピリピリした軍事施設が、画題として取り上げられるほどに台場は国民に愛されたのである。通常台場の泥絵はその特徴的な海上石垣構築物として表現される。『泥絵東海道五十三次品川』に描かれた3基の台場はまさに、完成した第1台場から第3台場を石垣と土塁で描いている。ところが、今一つの泥絵は『御殿山』と題し、安政元年(1854年)5月3日に完成したこの3基の台場が完成される前、御殿山が花盛りの春に描かれている。そこには、埋め立てられ、石垣構築前の土盛による島と外構の柵、工事小屋がそれぞれ3個描かれている。まさに、構築中の品川台場泥絵である。台場は危機感の中で出現したが、江戸庶民の関心の的、希望の星であったのかもしれない。

時代は変わり、明治陸軍は江戸湾防衛として、富津沖に東京湾海堡3基を明治14年(1881年)から40年かけて完成させた。中でも第3海堡は水深40m、激流の中に構築された世界でも類を見ない海上要塞島である。第3海堡は航路のため消滅したが、第1、第2海堡は今も自衛隊のレーザーサイトとなり、立入ができない。このように緊迫した国際情勢が出現させた江戸湾東京湾海堡であり、品川台場であるが、今、周辺は『お台場』として、都民の人気スポットである。台場も陸続きとなり、第3台場は公園として、開放されている。



泥絵東海道五十三次品川